

巻頭言

茗溪塾

2007. 2月号

茗溪塾教務部 03-3659-8638

合格の扉

茗溪塾塾長 宇野 雅春

一年中で一番不安で辛く、でも一番うれしく、さらに一番悲しいときもある、そんな日はいつでしょう？まるで、なぞなぞですが、答えをいうと「合格発表の日」が正解です。

中学受験が終わり、高校受験、大学受験がピークを迎えています。「受験」が仕事ですから、同じことの繰り返しと思うかもしれませんが、毎年振り出しに戻ったようにもう一度経験し直しの感じです。そして毎年違う意味での辛さがあります。

今年、中学入試はかつてない厳しい受験になりました。一人一人の気持ちに寄り添うと、さしずめ合格発表の日は、天国と地獄を行ったり来たり、「この一日さえなければ喜びの多い仕事なのに…」とつくづく愚痴が出るほどに辛い思いです。連絡が来るまであれやこれやと考えて、来てからまた、あれこれ悩んでといった具合です。指導している先生なら、みんなそうだと思うのですが、不合格が出たときにこそ、あれこれ頭の中を反省が巡ります。「あのとき……しておけばよかった。」「そう言えばちょっとゆるんでいたな。」とか「もっとこんな事しておけばよかった。」などです。よほど生徒達の方がしっかりしていたりもします。そんな2月2日の夜、1日、2日と第一志望の同じ学校を受験し続けて不合格のS君がいました。予想しなかった不合格に面談を組みました。

3日目は定員10名という最も可能性の低い受験です。「やはりダメなのか。」という思いが頭をよぎります。「本人の力を信じましょう！」と親に言いつつも心の中はぐらついていきます。「力はあるはずだけど、悪いときははとことん悪いし…」確信が揺らぎます。自分の確信で親には「大丈夫です。」と言っていたこともあり「責任」を感じてしまうのです。S君はその日、遅くまで塾での調整をして帰りました。「力を出せば受かるから！」夜遅く帰って行くS君の背中に私の声は白々しく聞こえたかもしれません。

他のいくつかの不合格もあってその夜は眠れませんでした。親とは、もしダメだったら次の対策を取ることにして3日の試験が終わったら塾に直行し、結果を見た後、押さえの学校を本人に説得することにしました。

当日、国立の激励を終えて塾に行きました。S君の受験した学校は今年人気上がり、3回目だということにたくさんの生徒が受験しているという情報がありました。合格者10名の中にはいるということはほぼ不可能という思いにとられました。おさえ校の願書を用意してK教室に向かいました。夕方5時、合格発表の時間が過ぎました。

「甘かった」という思いが何度も脳裏を横切りました。そして電話がなりました。名前をつけられ覚悟を決めて電話にでました。お母さんが泣いています。「合格しました。」

その後は、私の声もうわづっていたと思います。何を言っていたのか覚えていません。たった10名の発表の中に彼の番号があったということなのです。本人は知らないまま塾に向かっているとのことでした。

心なしか沈んだ様子でS君は塾のドアをあけて入ってきました。私がさっと右手をさしのべると何？という風に首をかしげました。「合格おめでとう！」「えっ受かった？」喜びが一瞬顔に広がりました。「お父さんが番号見たって！」と言うと合格を実感できたのかこみ上げるものがある、彼はわーっと泣きだしました。私も思わず泣いてしまいました。本人の肩に触れながら、ずーっと不合格の思いをためて肩を張っていたのだろうとその堅さに彼の気持ちを思いやりました。こんな思いをしている生徒は多分たくさんいるのだと思います。

「合格の扉」は誰もがあけることができるものではありません。「合格の扉」をあけるのは本人にしかできないことです。

長い努力と苦勞の末に得られる貴重な瞬間だと思います。